

田んぼリンクは終わらせない。

写真／氷点下の中、水まき作業を続ける大内秀一さん
(1月20日撮影)

復活への思いがひとつに

1月20日、雪におおわれた極寒の山木屋の地で、一人黙々と水まき作業を続ける人物がいた。

原発事故前、田んぼリンクの製氷作業を手掛けていたメンバーの一人で、「川俣スケートクラブ」副会長の大内秀一さん(67歳)だ。

山木屋は、地区の除染がほぼ完了し、昨年8月末から避難指示解除に向けた住民の準備宿泊が始まった。そんな中、山木屋地区ににぎわいを取り戻すため、山木屋のシンボルであった「田んぼリンク」復活の計画が持ち上がった。

田んぼリンクは、昭和59年から、「冬の寒さで家にこもりがちな子どもたちが、家の外で元気に遊べるように」という地元のみなさんの思い

のもと、多くの有志の手によって、収穫を終えた水田に水をまき、氷を幾重にも重ねて作られていた。

しかし、原発事故から約5年が経過した今、ゼロからのスタート。氷点下の山木屋で毎晩続く作業を、実際に誰が行うのかという問題に川俣スケートクラブは直面した。

「誰もやる人がいない。田んぼリンク復活は、以前のメンバーでやるしかない」

大内さんをはじめ、スケートクラブ菅野十一会長、高橋篤男副会長の思いは一緒だった。この時、田んぼリンクの復活が決まった。

人数は少ないながらも経験豊かなメンバーがそろい、田んぼリンク復活への準備は整ったかのように思えた。しかし、田んぼリンク復活への道のりはそう甘くはなかった。

情熱をかけ、奇跡を信じた

1月9日、思いがけないことが起きた。菅野会長が突然の病で、製氷作業を続けることができなくなってしまったのだ。

残されたメンバーは二人。しかし、大内さんは、田んぼリンク復活を諦めなかった。

山木屋地区の除染や復興に関わる業者、関係者、時には田んぼリンクを取材中のカメラマンにまで頭を下げ、製氷作業の手伝いをお願いした。

大内さんの必死な姿に、その願いを断るものはほとんどいかなかった。

そして、次第に「子どもたちの笑顔を取り戻したい」という同じ思いを抱く仲間が増え、午後3時を目安に、田んぼリンク脇のプレハブに同志が集まるようになっていた。

田んぼリンクの製氷作業は、自然との闘いでもあった。暖冬にも悩まされ、例年であれば田んぼリンクを開放していた1月16日、初めて氷が張った。

いよいよ本格的な製氷作業が始められると思った矢先、今度は大雪が降り、雪を踏み固める地道な作業に時間を費やした。

その後も製氷をはじめては雪が降り、しまいには例年にならない暖かさが水を溶かしはじめた。

「やっぱり自然の力には勝てない。もう1月31日の田んぼリンク復活祭には間に合わない」と、1月26日、大内さんも復活を一瞬諦めかけた。

しかし、以前田んぼリンクで見ていた子どもたちの笑顔、そして、同じ思いを抱きながらも、製氷作業を続けることのできなかった菅野会長の気持ちを思うと、手を止めるわけにはいかなかった。

「なんとかこの冬のうちに田んぼリンクを復活させたい」そんな思いだった。

そして田んぼリンク復活祭当日、誰がああ奇跡を想像できただろう。

